

(R7.10.1 後期始業式)

本校は2学期制を採っていますので、今日はちょうど折り返し点ということになります。

この夏、私は1週間ほどスペインを旅行しました。きっかけは、1年ほど前に聞いたニュースでした。バルセロナで建設中のサグラダ・ファミリアが、間もなく完成に近づいているということです。完成まで数百年はかかると聞いていたのにあと数年でできてしまう？建設用のクレーンとともにそびえる姿こそ、自分の生きている時代のサグラダ・ファミリアだと思っていたのに、完成してしまうってどうなの？…そんな胸騒ぎです。

他にも、プラド美術館で絵を見たい、地中海をこの目で確かめたい、本場のパエリアを味わってみたい……と想像が膨らみ、ついに一人で出かけてしまいました。

旅の話を聞きたいと思う人が多いかもしれませんが、それについてはまた別の機会にし、今日は戦争についてお話しします。というのは、今年は戦後80年という大きな節目にあたるからです。先月の吹奏楽部の定期演奏会でも、そのことを意識した選曲がされていました。節目とは、過去を振り返り、未来を見据える大切なきっかけになります。

私の父は大正15年、本校の前身である山形裁縫女学校の創立と同じ年に生まれました。もし生きていれば今年99歳。戦後80年ですから、父が19歳のときに満州——今でいう中国の東北部になりますが、そこで終戦を迎えました。父は兵隊として満州に召集されていたのです。

父の兄は、結婚と同時に開拓団として満州に渡りました。しかし、開拓団といっても実際は厳しいものでした。1930年代、日本は農村の貧困や人口の多さを背景に、多くの農民を満州へ移住させました。はじめは志願が中心でしたが、やがて集団移住が広がります。表向きは農業開拓のためでしたが、実際には「国防の盾」としての役割を担わされていました。つまり、ソビエト連邦——現在のロシアの中心となる国——との国境沿いに農民を定住させ、人間の防波堤にしようとしたのです。

しかし、1945年8月9日、終戦の1週間前ですが、ソ連が満州に侵攻すると日本軍は崩壊し、開拓団は取り残されました。徒歩での避難が始まりましたが、飢えや寒さ、襲撃で多くの人が犠牲になりました。中には絶望の中で集団自決を選ばざるを得なかった人々もいました。生き延びた人々もシベリア抑留など、厳しい生活を強いられ、数年たってようやく日本へ引き揚げてきました。私の伯父もその一人でした。

先月私は『黒川の女たち』というドキュメンタリー映画を観ました。

そこでは、岐阜県黒川村から満州に渡った「黒川開拓団」が直面した過酷な現実が語られていました。敗戦の混乱の中、軍に見捨てられた彼らは、生き延びるために恐ろしい選択を迫られました。18歳以上の未婚の女性15人を「接待」という名目でソ連兵に差し出すことになったのです。

「接待」とは言葉を柔らかくした表現で、実際には女性たちが望まぬまま性の犠牲にされたという事実でした。ある証言者は次のように語っています。「怖くてたまらなかった。嫌だと思っても、拒めば村のみんなが殺されるかもしれない。だから従うしかなかった。」

その犠牲によって多くの人が生き延び、日本に帰ることができました。しかし帰国後、彼女たちを待っていたのは「恥さらしだ」「けがれた存在だ」という誹謗や中傷でした。誰にも語りことができず、声を上げることも許されず、長く沈黙を強いられました。

それでも戦後70年が過ぎた頃、女性たちは勇気を出して語り始めました。「死ぬ前に、本当のことを知ってもらいたい。私たちは生きるために、みんなのために背負わざるを得なかったのだ。」

この事実を聞いた孫たちは、口をそろえて「おばあちゃんを誇りに思う」と語りました。そして、長い間笑顔を失っていた女性たちが、ようやくよく笑うようになった姿が描かれていました。私はこの場面に最も心を揺さぶられました。

ロシアのウクライナ侵攻から3年7か月、ここでも女性が被害を受けた例が報告されています。戦争は、女性や子どもなど、弱い立場に置かれた人々を犠牲にしがちです。だからこそ、彼女たちが沈黙を破って語った証言には重みがあります。戦争とは何か、人間の尊厳とは何か、そして同じ過ちを繰り返さないために私たちはどう生きるべきか——その問いかけを、戦後80年という節目の年に自分自身に投げかけたいものです。

結びになりますが、道を往復するとき、行きよりも帰りの方が早く感じるものです。今日から後期になりますが、3年生にとっては、卒業式は3月1日なのでさらに短く感じるはずですが。すでに就職試験も始まり、大学などの受験も動き出しています。どうか気を引き締めて、しっかりと準備をしてください。そして何より、残りの5か月、充実した高校生活を送ってください。